

〔課程-2〕

審査の結果の要旨

氏名 坂本 健太郎

本研究は 2 型糖尿病患者の危険因子管理において、諸薬剤がいわゆる残余リスク制御に対して及ぼしうる効果について検討したものである。

並立的な 2 試験を通じ、以下の結果を得ることができた。

〔試験 1〕

1. 標準的な食事負荷試験により、スルホニル尿素薬であるグリメピリドはインスリン分泌の上昇を伴い、食後 1 時間血糖および食後 2 時間における血糖上昇を抑制した。
2. 一方食事負荷試験において、ビグアナイド薬であるメトホルミンは、食後血糖と空腹時血糖をほぼ同等に改善させた。インスリン分泌への影響はなかった。
3. 相関分析では、両治療群とも空腹時血糖、食後 1 時間血糖、食後 2 時間血糖の変動がそれぞれ HbA1c の低下と有意に相関した。重回帰分析ではグリメピリド群では HbA1c の改善が食後 1 時間血糖に起因していたがメトホルミン群では食後 2 時間値と空腹時血糖の低下に起因していた。
4. 残余リスクと関連しうる食後高血糖への両薬剤の作用、及びこれを介した血糖改善への寄与が示唆された。

〔試験 2〕

1. 標準量のスタチン薬で脂質目標未達の 2 型糖尿病患者におけるスタチン倍増とエゼチミブ追加の比較において、エゼチミブ追加群において優位な LDL-C 低下率の上昇がもたらされた。
2. sd-LDL-C や RLP-C 等もエゼチミブ追加群において優位な低下率を示し、動脈硬化原性の脂質プロファイルの改善効果が示唆された。
3. エゼチミブ追加群において優位に高率な目標達成率が得られた。

以上、本論文は 2 型糖尿病患者の危険因子管理において、諸薬剤がもたらす効

果を検討し、残余リスクに対して介入しうる可能性を新たに示したものと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。